

牧里先生との思い出

— 出会いから 14 年を振り返って —

立正大学社会福祉学部 川 本 健太郎

はじめに

これまでの牧里先生の研究活動を継承し、発展を目指した論考については、大阪府立大学、そして、関西学院大学それぞれの研究を生業としている卒業生たちが中心となり、退官記念として一冊の本にまとめあげられた。光栄なことに私も寄稿を許された一人であり、今年度2月には相川書房より刊行される予定になっている。そのため、本稿は、研究者としてアカデミックな視点から牧里先生の功績を追うものではなく、一人の卒業生としての立場から、恩師との思い出を書く権利を得たと理解している。ただ、牧里先生は、各分野で活躍されている卒業生を300名近く排出されている。そのなかで、なぜ、私に依頼が来たのだろうかと思いを巡らせた。その点を、私なりに検討してみると、公私にわたりここまで牧里先生にご苦勞をかけ続けている教え子はいないという答えに行き着いた。私は、学生時代から成績は振るわない不良学生である。にもかかわらず、大学で職を得て、牛歩のスピードではあるものの研究や実践を継続することができている。牧里先生との出会いがなければ、今の私はない。まさに、牧里先生の教育業績の一つとして大学人としての私がいる。その業績としての私がどのように作られてきたのかを語ることが、本稿に寄せられた期待であらうかと考えた。

そして、本稿を通して、牧里先生の教育者、研究者として、また、何より人としての魅力を伝えることができれば幸いである。とはいいつつ、牧里先生に対して失礼にあたることを重々承知で不躰な言葉も「思い出」としてありのままに表現したい。そのあたりについて、読者の方々からご批判を受けるかもしれないが、私を指名した時点で、牧里先生の了解を得ているものとの認識に立ち書き進めていきたいと思う。

1. 牧里先生と出会うまで

私は、大学2年次の春まで、学生生活のほとんどを費やしてきたスポーツで致命的な怪我を負った。介護職はもとより、当時の状況では、長時間の立ち仕事も厳しく、適応できる職種は限られてしまうとの不安が襲ってきた。そのことが功をそうしたのか、3年次より、ようやく真面目に大学に通うことになり、自身の将来とも真摯に向き合うようになった。

当時の私の指導教官は、公衆衛生学を専攻する西垣千春先生（現在、神戸学院大学教授）であった。西垣先生は、予備知識もなく思いつきで発言する私の声にも丁寧に耳を傾けてくれた。とりわけ、ゼミのメンバーで「介護保険制度の展望」と題して文献やデータを収集していたころ、関心と結びつくフィールドに熱心に連れ出してくれた。社会福祉施設、社協など様々であった。その一つ一つの経験を通して、学生ながらに、様々な思いが巡り、原点を見つめ直すきっかけを与えてくれた。

そもそも自身が福祉を学ぶきっかけとなったのは、二世帯住宅で祖父母の在宅介護を経験し、家族介護の大変さを幼い頃から目の当たりにしてきたことである。そして、両親、また、増え続ける高齢者を誰がどのように支えていくのか、自身もプレイヤーとなって考え行動していきたいと大学に進学した時のことを思い返した。この調査で得たものは、知識を持たない学生であった私にでも、公的介護保険は制度設計上の問題でいずれ脆弱なものにならざるをえないと結論付けることができた。にもかかわらず、現場サイドに「危機感」がないことに不安を覚えた。そこで、だれが、介護保険制度のあり方を決めているのか。

そもそも、なぜこの制度が必要だったのか。このような漠然とした問題意識から介護保険計画を策定している自治体での課外インターンシップを希望した。ここでも西垣先生の全面的な協力の甲斐あって半年間のアルバイトとして、ある自治体に行くことができた。そこでは、高齢福祉課の配属となり、当時の在宅介護支援センターの月間報告の管理、敬老金支給業務などが日常的な業務として与えられた。また、介護保険計画ではないが、念願であった行政計画である高齢者福祉計画の策定委員会に事務局の一員として陪席することが認められた。策定委員にはNPOの代表者もいた。いわゆる住民参加型のNPOであり、それほど事業経営が安定しているとは言えない法人である。しかし、策定員会での発言は、最も光っていた。当事者や地域住民の声を代弁するものであり、その熱意に感動を覚えた。今思うと、現在の研究テーマの起点になったのかもしれない出会いであった。そして、このNPOを訪問した。民家改修型のいわゆるデイとサロンの間の自主事業である。特別養護老人ホームとは懸け離れた設備環境であるが、使命を持ち活動を展開している人々と出会い、何か、希望も見えた。ただ、話を聞けば聞くほど、経営の難しさを知った。これらを卒業論文としてまとめた。そこで、自身もまたこうした活動を立ち上げるか、応援する立場になりたいと強く思い、学びを深めるために大学院への進学を決意した。

2. 牧里先生の研究室の門をたたく

学部4年次になった私は西垣先生から研究計画の指導を受けていた。西垣先生は、公衆衛生を専門にされていることもあり、住民参加型NPO研究をテーマに取り上げた私に牧里先生を紹介してくれた。西垣先生と牧里先生は、とある自治体の計画委員会で一緒されたことがあったと聞いている。ただ、私にとっては、ピンとこなかった。ふと思いついたのは、地域福祉論のテストで「マキサト・マイジ＝機能構造論的アプローチ」と暗記作業をしたことだけだった。さらに、失礼きわまりない話であるが、国家試験のテキストに掲載されている人物は、歴史上の人物と思い込んでいた。その後、何冊か牧里先生がご執筆された文献を読んだ。しかし、予備知識もない当時の私にはとても難解であった。私はついていけないのか、相当不安であったが、それ以上に、不良学生であった私を牧里先生に引き合わせることに西垣先生は何倍もの不安があったようだ。そのため、西垣先生とともに大学院入試事前面談（当時の社会学研究科では必須とされていた習慣）として、研究室に伺った。それが初めての出会いとなるのだが、牧里先生は、「まるで母親が引率してきたかのようだった」、それに、「何がしたいのか」と尋ねても、口籠り答えられなかった自身のフォローの全てを西垣先生に委ねていたことも含めて、「前代未聞」の出会いだったと未だに笑の種にされている。

牧里先生からは、とにかく、英語と専門科目は過去問をしっかりと取り組むこと、研究計画書は、時間の許す限り調査について綿密な計画を立てることとアドバイスをいただいた。面談を終えて落ち着いた時、私自身は、アドバイスをいただけたことを一言芳恩として受け止め進学希望がより強まった。しかし、その時の牧里先生の心情は、「きっと落ちるだろう」と思っていたようである。

3. 大学院ゼミで受けた洗礼

引き続き西垣先生に指導を仰ぎながら入試対策に励んだ。その結果、牧里先生の「落ちるだろう」との期待とは反対に無事にパスすることができた。入学当時の大学院は、高田眞治先生、荒川義子先生、浅野仁先生がご健在であり、武田建先生も心理学を非常勤講師としてご担当なさっていた。今思えば、伝統的な関学ソーシャルワーク教育を培って来られた先生方から直接指導を受ける機会に恵まれた、最後の世代であったのかもしれない。その一角をなす牧里ゼミは、唯一の地域福祉研究室であり、大所帯であった。院生の層も厚く、社会福祉協議会、コンサルタント会社の第一線で活躍する実務家から研究員、すでに大学で教鞭に立っている研究者の先輩院生方に、現役院生3名が囲まれる形になった。そして、4月も早々

に、現役院生が挨拶を兼ねた卒業論文と研究計画の概要を順に報告するように命じられた。

およそ15分の報告を終えると、先輩院生から、矢継ぎ早に質問が重ねられ、その上で、アドバイスをいただく時間が続いた。読むべき文献、押さえるべき理論、研究計画の作り方、文章表現等々、内容というよりは論文作法についての指導が七十分ほど続いた。途中からは記憶もなく、真っ白になった。まるでサウンドバックのようだった。その後、残りの時間、牧里先生にバトンが繋がれ総括を受けることになった。少し期待したフォローや慰めは一切なかった。先輩院生以上に、理論研究や調査のレベルの低さをダイレクトに指摘してきた。最後の一撃といわんばかりのとどめであり、まさに、洗礼を受けた瞬間であった。そのおかげで、入学できた喜びは、あっという間に消え去り、牧里研究室でのサバイバルな日々が幕を開けたことを実感した。

ただ、今では、古き良きゼミスタイルに懐かしさと改めて恵まれた環境であったことを実感する。今でも縁が続く諸先輩方からいただいた熱心なご批判、アドバイスは、「議論する」ということの意味や方法を学ぶ機会になった。批判は否定ではなく、研鑽を積むということの面白さであると知った。牧里先生は、よく「これでは、論文とはいわない。随筆（エッセイ）だよ」という。研究は、学「術」であり、技法が大切であること、その基本的な研究者としての姿勢を学ぶには、十分すぎる贅沢なゼミの時間を過ごせたことに今では感謝している。

4. 牧里研究室の機能と役割

牧里研究室の特徴は当時からも有名であった。それは、現場に研究室があるかのように、フィールドワークを基本としている点である。地域福祉計画、小地域福祉活動、社会福祉協議会、NPO やまちづくり一般に及ぶまで地域や組織種別を問わずフィールドは多様であり、年々、拡大していく一方であった。こうしたフィールド一つ一つに牧里先生は、研究テーマや関心によって院生から適任者を選択し配属していく。私には、宝塚 NPO センター（現在、牧里先生が理事長）でのインターシップに始まり、地域福祉計画、そして、OSS（大阪社会福祉研究会）の事務局、こうしたフィールドワークや研究会を支える研究費の事務局サポートなどが1年目から与えられた。

OSS は、恩師や重鎮の先生方から離れて、自由に学び合える若手研究会をという目的で、当時30歳くらいであった牧里先生ら若手研究者が立ち上げた研究会である。だが、すぐに岡村先生に見つかり、時を経て、今では、牧里先生の先輩にあたる右田紀久恵先生が実質的な座長を務められている。今では珍しい、理論原論を主とする貴重な研究会である。牧里先生は、右田先生という岡村重夫研究室時代からの先輩を前に、いつも緊張されていた。打ち合わせでも、ほとんど話すこともない。まさに当時の私と先輩院生の関係であるように見え、研究室で生まれた関係は生涯続くことを学んだ事務局仕事であった。

それ以上に、当時、もっとも印象的だった仕事は、大阪市各区の行政計画であるアクションプランのアドバイザーに、若干23歳で任命されたことだ。大阪市中央区社会福祉協議会で開催された近畿地域福祉学会の一室で、待ち受けていたとある区社会福祉協議会の担当者に対して、牧里先生は、「彼でどうだろうか」と私を紹介した。先方は、私のことを当然知っているはずもないが、「先生がご推薦なさるなら」という。私もわけもわからず「よろしく申し上げます」と言ってから、2年に及んでその役を務めることになった。知識も経験もない割に与えられた仕事は、高度であった。胃が痛む思いをしながら、管理職が立ち並ぶ中での研修や活気のある大阪住民を前に住民懇談会でのワークショップの実施、策定委員会では、これらの活動成果を報告した。社会福祉協議会に務める先輩院生であった佐藤寿一氏（現宝塚市社会福祉協議会）にはいつも相談に乗ってもらい、牧里先生にはスーパーバイズをいただきながら進めていくものの、私の力量不足により上手くいかない経験も多分にさせていただいた。校区别的ワークショップの声を、相当な時間を割いてまとめあげたデータを策定委員会の方に「言葉遊び」と批判されたこともあった。その批判も後には、実践を言語化していくことやそもそも論文を書く意味を考えるきっかけになったとは

思う。しかし、当時は、背伸びをしても足りない重責を簡単に与える牧里先生の指導方法に、荒療治にも度が過ぎると恨み節を並べながら同期と酒を酌み交わしていたのも事実である。

その他、宝塚まちづくりプロジェクトにも参加した。宝塚ファミリーランド跡地の開発を巡り、宝塚市役所、阪急グループと商学部の定藤繁樹先生が共同研究を組織しているなか（特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP））、牧里先生も名を連ね学部ゼミ活動として参画していたのである。そこには、当時、学部生であった現人間福祉学部橋川健祐助教らゼミ生が数名、院生として、私と同期が加わった。高齢者や富裕層向けマンションの建設案、コミュニティビジネスの展開プランなど宝塚のブランドイメージを活かしたまちづくりビジョンを構想する会合であった。

ただ、なぜ、牧里先生はこの仕事を引き受けたのだろうかと思った。地域福祉研究者はマンション建設に至るまでを実践として捉えられなければならないのか。日々、広がっていく世界に戸惑いながら過ごしていたが、ゆくゆく、ここにも牧里先生のストーリーが隠されていたことに気付かされた。

この話を牧里先生に持ちかけた定藤繁樹先生の実兄は障害当事者研究で著名な定藤丈弘先生であり、大阪府立大学時代の元同僚である。定藤丈弘先生は交通事故に遭われ、身体障害当事者となり、若くしてこの世を去られた。牧里先生から直接、思い出話を聞く機会は少なかった。したがって、推測でしかないが、定藤丈弘先生と同じく牧里先生は、カリフォルニア大学パークレー校に留学されていることや、「勇気をもって人に迷惑をかけよう」という定藤丈弘先生の言葉と当事者主体を重んじる牧里先生の考えは共通しており、強く影響しあった人物であったように思っていた。こうした縁のつながりから、実弟である定藤繁樹先生からのお声かけにも快くお引き受けされたのだろうと考えていた。

その後も定藤繁樹先生とのご縁は深まっていった。とりわけ象徴的なのは、社会起業の代表例でもあるグラミン銀行の総裁ムハマドユヌス氏を招聘した特別講演の実現である。その立役者は、定藤繁樹先生であり、社会起業学科を応援するために、ご尽力いただいた。

牧里先生の一つ一つの縁を大切にされる姿には、いつも感服する。そして、その縁が、イベントや実践プログラムとして形になって現れる場面にもよく出くわした。それは、立場を問わず、どなたにも、等しく、そして、良き所を見つけようとされているからこそ広がる縁だと感じていた。そのおかげで、先生を頼りに、現場からの要請は後を絶たず、院生は、実行部隊となってフィールドを駆け巡っていた。牧里研究室は、大学と現場の垣根を越えて、人と人を結びつけるセンターとしての機能をもち、社会関係資本の蓄積に貢献する一つの地域福祉拠点の役割を果たしてきたと言えるのかもしれない。

5. 研究者としての姿勢を学ぶ

こうした現場で送る日々の楽しみは、頻繁にある夜ゼミの開催である。決まって牧里先生が現場に現れると、仕事が終われば、場所を変えての飲み会が始まる。良くも悪くも「ノミネーション」という言葉も、ここで教わってしまった。このノミネーションの場の魅力の一つは、日中ゼミでは恐れ多くて聞けないこともタイミングを見計らいながら聞けることである。研究の悩みや自身の安易な考えを少しずつ牧里先生にひけらかしていく場であり、確認作業を行う大切な時間なのである。

こうした場で自身にとって大変大きな収穫を得たことがあった。当時、マスコミを賑わしていた凄惨な大阪姉妹殺害事件が話題に上がり、徐々に、加害者支援と被害者支援のあり方をめぐる議論に展開していった。自身は、被害者支援は手薄な割に加害者支援に財政的コストが割かれていることに批判的な見解を示した。また、当時の加害者を単に許せないといった。それに対して、牧里先生は、そういう感情論に左右されているのであれば、「研究者には向かないな」と言われた。なぜ、罪を犯すに至ったのか、一つ一つをみることで、その上で、どのような層の人たちが何を目的にどのような罪を犯しているのか、分析的に考察した時、本当に、その人個人の問題として議論を終えられるのか、という指摘である。もちろん、法的な裁きをどうこうといった議論ではないし、個人的な要因を完全に排除した発言でもない。つまりは、

問題の発生要因を多面的、重層的な視点に立ち読み解くことで、社会の構造的な要因にも目を向けることの大切を解くものであった。牧里ソーシャルワーク論の基本視点を学んだ気がした。きっと、牧里先生ご本人はこのエピソードも忘れ去っているだろうが、私は、当時のお店もシチュエーションも鮮明に記憶している。

次に、こうした場がもたらすものは、多様な立場の人たちがゆるやかなつながりを育むなかで、新たな価値を生み出していく場にもなっていることである。牧里先生の性格や関西のノリも手伝っているのかもしれないが、飲み会で新しいイベントの企画が生まれることも少なくない。いわゆる「弱い靱帯の強み The strength of weak ties」というべきものを体験できていたのかもしれない。私が同席していたわけではないが、今年度で10回目を迎え、毎年1000名以上に及ぶ来場者を迎え開催される小地域福祉サミット(校区サミット)も、豊中駅前の居酒屋で開かれた飲み会からうまれたことは有名な逸話である。

6. 修士論文のテーマの設定

このように現場を中心に1日1日が過ぎ行く中、思うように修士論文が進むわけもなかった。それに、私自身、もとをただせば、福祉事業(起業)を立ち上げる勉強をしたかった。こうしたタイミングに浅野研究室に所属していた松岡洋子氏(現東京家政大学准教授)からお誘いを受ける。松岡氏は、デンマークの高齢者住宅をテーマに研究を進めており、介護の相談機関や施設を開設したいとの構想ももっていた。そういうこともあり、いろいろと学びの機会をいただくことが多かった先輩の一人である。その中で、西宮に、社会福祉協議会が主催する介護者家族会の世話人(当事者代表)が、独立してマンションの一室を開放すると言っているから、話を聞きに行こうと言われた。そこで出会ったのが、丸尾多重子氏(現、NPO法人つどい場さくらちゃん理事長)だ。阪神淡路大震災後、両親、そして、兄を10年間にわたり介護し看取りを行ってきた。また、兄は、鬱病を罹患し最期は自害を遂げた。丸尾氏は、壮絶な家族介護を経験し、介護者を支えたいとの思いで24時間365日開放したつどい場を開きたいと熱く語った。まさに、自身の大学院の進学に至った動機そのものであると思った。その日以来、暇を見つけては丸尾氏を訪ねた。いつも夕飯を囲みながら、丸尾氏の介護経験談と高齢者福祉の現状に対する怒りに耳を傾けていた。その多くに共感し、これから作り上げるつどい場の一員になりたいと思った。それと同時に、丸尾氏の煮えたる思いにふれた時、自身の思いはまだまだ浅はかであるとの確認ができた。そして、自身で起業するのではなく、彼女のような人々の思いを形にするためにサポートする方法を身につけることに役割を見出したいと考え、つどい場のできるまでを修士論文の一つの柱にしようかと考えていた。しかし、研究の術も身につけてない私にとって、つどい場という新たに事業化(起業)していくプロセスを研究として捉える力もなく、単に実践に参与していただけになっていた。そこで、牧里先生からは、OGN(大阪元気ネットワーク)という中堅と老舗が織りなす大阪を代表するNPOが軒を連ねるネットワーク組織を研究の対象にするように、指導を受けた。そして、それぞれの代表者のインタビューを行うなかで、彼らを社会起業家として呼称することとした。この社会起業家という言葉は、斎藤(2004)「社会起業家-社会責任ビジネスの新しい潮流」岩波新書により示された、日本では新しく一切の馴染みのない一つのリーダー像のあり方を説明しているものであった。そのため、市民起業家や住民起業家のほうが適しているかもしれないなど、いろいろとゼミでは意見をいただくことになったが、牧里先生のお墨付きをいただき修士論文のテーマの軸に決定した。ただ問題は、テーマを決めたこの時点で修士2年度目の春も過ぎてからのことであり、この時点で周囲とは比べようのないくらい、相当出遅れていた。

7. 牧里先生のキャリア教育、その1

修士2年目に入ると論文も本格的な調査と執筆が始まった。加えて、減るよしもない、現場の仕事に追

われる日々が続き、気がつけば、夏は過ぎ去り、秋を迎えていた。周りを見渡すと、同期の優秀な院生諸君は、それぞれに修士論文を進めながら、県社会福祉協議会や老人施設、児童福祉施設など自身のキャリアを自らで決めていた。ハッとした頃には、一人取り残されていた。牧里先生からも心配の声をいただいた。自身は、つどい場への思いを募らせながらも、「ボランティアは就職ではない。」と牧里先生に苦言を呈された。他のNPOもあるが、それでは、つどい場から離れることになると逡巡していたところ、実習助手のポストが空くとのお話を聞いた。その席は、先輩である加山弾氏（現東洋大学准教授）の異動に伴う人事であった。研究を続けること、実習指導に熱心に打ち込むことを大前提に、つどい場に関わるという条件で、加山氏も牧里先生も後押ししてくれることになった。その結果、11月も半ばとなったころ、なんとか内定をいただくことができた。あとは、修士論文を書き上げ修了しなければ、内定は水の泡になってしまう。

そう思っていた矢先の11月末の大学院ゼミで衝撃が走った。院生の同期が先に「地域福祉計画への住民参加」をテーマにした研究の調査結果、考察を報告した。あとは、結論をまとめていく作業であることを前提に、ここばかりは先輩の院生もエンカレッジメントを基本にアドバイスを送っていた。衝撃は、そのあとの牧里先生のコメントである。「対象計画を地域福祉計画から障害者福祉計画に変更しなさい」といった。何てことだろうか、この後に及んで、その一言は、半年の調査を一掃するものでないだろうか、と思ひながら、憐れむ暇もなく、次に私の番がまわってきた。案の定、私も地に落とされた。なんと、「研究テーマを変えなさい」というものであった。

その日から、1月16日の締め切りまで二人して、通称科研部屋（全学共用棟）での寝泊まり生活が始まった。私は、正月もその部屋で一人年越しをした。何とか、追調査を行い、完成度は低いものの二人ともギリギリまで粘りあげた末に提出することができた。後々聞けば、二人とも、調査パートだけが前後の構成とのバランスが取れていないことへのアドバイスだったと理解できたが、言葉を聞いた時は、卒倒しそうなほどのインパクトであった。今もその日の記憶はトラウマのように頭をよぎる。

8. 教育現場における牧里先生

なんとか助手になると、これまで教師と学生であった関係が、職場の上司部下の関係に変わっていった。色々見える世界も変化していったが、それぞれの先生方の研究や課外での活動をより知ることができ、日々、勉強になった。実習指導室長であった川島恵美准教授には、実習教育研究とともに進めさせていただき、北海道の調査にも同行させていただく機会をいただいた。助手業務と研究活動が一体となった恵まれた環境で、自由に活動を広げさせていただくことに今でも頭が上がらない。そして、牧里先生や今なお研究活動をご指導いただいている先輩院生の川島ゆり子氏（花園大学准教授）が進められていた、宝塚市社会福祉協議会での実習研究のお手伝いをさせていただく機会を得た。牧里先生は、コミュニティワークにこだわり、当時社会福祉協議会では異例であった1年間を通して実習を展開する通年型実習を提唱された。

牧里先生は、教育の現場でも変わらず、突破する力と術をもったプロフェッショナルであると思った。とりわけ教育、福祉現場は、人間関係や組織構造が硬直的である。その中で新しい何かを始めることは容易ではない。ご自身の著書でも記されていた（『地域組織化とまちづくり活動の支援』『社会問題研究』43(2), 377-393）まちづくり活動促進要因に照らし合わせるように、俯瞰的にグループダイナミクスを読み解きながら、ボトムアップの民主的リーダーシップを実践される中で、着実に成果を生み出されていた。その最たる実践が、日本で前例のなかった2008年の人間福祉学部社会起業学科の創設なのかもしれない。開設に至るまでの経緯は、紙面上には表現できない紆余曲折があったことを承知している。そこを乗り越えて、社会起業学科を創設された形跡はまさに牧里先生による社会起業実践そのものであると言っても過言ではない。「ワクワクする」という表現が最もしっくりとくるが、助手として働くことにやりがいと喜

びを与えていただいた。

9. 牧里先生のキャリア教育、その2

しかし、この助手というポジションは任期付きであり、2010年で満了となることは承知していた。ただ、自身の中で、せめて人間福祉学部の一期生の卒業を見届けるところまではスタッフとして在籍したい気持ちでいっぱいであった。その時、牧里先生、そして、武田丈先生とで、GP（大学教育の充実：Good Practice）の話を持ちかけてくれた。この補助金を取ることができれば、社会起業学科の実践教育は豊かにできるし、それに、助教のポジションを作ることができるというものであった。ただ、新設であり、実績もないため、採択の可能性は低いといわれたが、迷わずチャレンジさせて欲しいとの意思を伝えた。そもそも、後先を考えられる立場でも性格でもない私であったが、それ以上に、ただでさえ忙しい先生方が、仕事を増やすことを躊躇せず、この先の自身のキャリアを考えてくださっていたことに嬉しくて仕方がなかった。申請作業は、武田丈先生を筆頭に牧里先生、事務室の方との共同執筆作業となった。その作業は夏期休暇中にも及び、お盆にも関わらず、武田丈先生のご自宅まで押しかけたこともあった。結果がどうであれ、こうした準備に武田丈先生をはじめ多くの教職員が協力してくれたこと、その、チームづくりを牧里先生が牽引してくださったことだけで十分すぎる喜びを得ていた。その後、審査は進み、書類審査をなんとかクリアし、二次審査を迎えた。副学長（当時は浅野孝平教授）を始め、牧里先生、武田丈先生、そして私が席に着いた。私は余計なことを言わまいと、ただただ戦況を見守るだけであった。その結果、お三方の見事な連携プレーで面談を乗り越え、見事に採択に至ることになった。

そして、実際にGPが動き出すと、さまざまなフィールドワークに出ていくことになる。私自身も南米からアジアに至るまでフィールドを探し求めて渡航した。牧里先生も、西アフリカ、シャングリラに行く計画を立てていた。その時は、私も周囲も正直なところ、牧里先生の健康面を心配していた。「アフリカは遠すぎるし、シャングリラは高山病の恐れがあるからやめて欲しい」と思っていた。ただ、聞くはずもなく、「行ける時に行かないと」という。牧里先生の好奇心は研究者としての性なのかもしれないと思った。

この助教の期間中は、本当に多くの新たな経験を積むことになった。喜びと同時に悲しみ、情けなさ、さまざまな感情を抱く場面にも巡り合った。ただ、その中で、一貫していたのは、学生たちが常に、社会の課題や矛盾に向き合い、若い力を結集しながら、乗り越えようと常に努力を積み重ねていたことに励まされていた。このような環境は他にはないと思った。こうした学生のサポートを、実践教育支援室のバックアップを受けながら開設した社会起業サポートセンターの長である牧里先生、そして、武田丈先生、思いを共にするスタッフたちと担えたことは、今の私にはかけがえのない礎を築く日々となった。こうした経験を土台にしながら、今も私は大学で教鞭に立つことができている。

おわりに

牧里先生は、序列関係を好まない。それは、施設で過ごされた幼少期に秘めた思いやケースワーカーとして職に就かれていた広島での原体験からなのかもしれない。「権威」を持つことに敏感であり、一切振りかざすことはない。いつも、立場を越えて、学生、実務者、研究者など多様な人々との縁を紡ぎ、いつのまにか、機能的コミュニティを形づくっていく。このコミュニティを基盤に紹介しきれないほどの新たな知を開拓し、そして、実践を創造してこられた40年あまりの功績には、ただただ脱帽するばかりである。まさに「チェンジ・メーカー」と表現することがふさわしい。

もう一方で、教育者の顔は「チャンス・メーカー」である。私自身がその一人であるが、幾度となくチャレンジする機会を与えてくれた。失敗しても、また、その機会を用意してくれた。一度、学生と進めて

いたプロジェクトで、現場に迷惑をかけたことがあった。その時も、「責任を取るのはぼくだ」と言って、一緒に現地に出向き、迷惑をかけてしまったことを、相手方に一緒にお詫びしてくださったこともある。今、同じ大学教員として職について10年にもなるが、簡単に真似できることではない。

私は、権威や序列を嫌う牧里先生の性格を知りながら、勝手ながら「師」と仰いでいる。上司部下でもなく、親子の関係でもない。なんとも言い難い独特の心地よい距離感がある。勝手ながらこの先もずっと師事していくつもりである。

ただ、最近寂しさを感じる場面もあった。牧里先生は、昨年度のサバティカル（研究休暇制度）を明けてから、髭を黒く染めることをやめた。聞けば、もうすぐ、隠居の身だからと言う。それは、まだ早すぎる。ご退官される来年度以降は、サバティカル期間の延長であると認識いただきたい。まだまだ共同で進めさせていただいている研究は志半ばでもある。そして、最後に叱られることを覚悟して進言したいことがある。卒業生一同が期待しているのは、牧里地域福祉論、つまり、単著である。その時は、退官記念に勝る出版記念パーティーを企画したいと思う。